

## 球体としての世界



海外交流

高田 珠樹\*

World as aggregation of spheres

Key Words : spheres, Sloterdijk, architecture, green house

最近、アメリカの情報関連の大企業が、斬新なデザインの本社新社屋を建設することが話題になっている。アップルは、カリフォルニアのクパチーノに「アップル・パーク」と称して、巨大なドーナツ状の建物を建て、すでにそこで業務が行なわれている。一方、グーグルはといえば、やはりカリフォルニアのマウンテンビューに、巨大なサーカステントのような建物を計画中だという。一方、通販大手のアマゾンには、ワシントン州のシアトルに、巨大な泡のようなドームを複数積み重ねた、「スフェアズ」と題する社屋で対抗している。これらの例と比べると、時期的にはすでに少し古くなってしまったが、2012年に移転を完了したフェイスブック社の社屋は、屋上に設けられた庭園が話題になった。

もともと私は、奇抜な建物が次々に出現するといった類い話題よりも、伝統的な街並みをどう保存するか、といった話のほうが性に合うのだが、こういったIT関連の巨人たちによる斬新な建築は、単に高さや奇抜さを競うのとは異なった挑発的な何かを感じさせるのも事実である。普段、特に現代建築に目を凝らしているわけでもないのに、今回、こういったIT企業の社屋の建設が少々気になったのは、特にアマゾン社の独特の形状の新社屋が「スフェアズ」と題されていたからである。

英語の「スフェア (sphere)」は、もともと「球

や「毬」を意味するギリシャ語の単語「スパイラ」に由来する。そこから、球体としての宇宙や天体といったことを意味する。さらには地球を囲む成層圏を指す stratosphere、雰囲気や大気圏を意味する atmosphere という語にも、この「スフェア」が含まれている。日本ではあまり知られていないのだが、この「スフェア」という概念が哲学や現代思想の文脈で話題となるとき、そこでは、とりわけ現代ドイツの哲学者ペーター・スローターダイク (Peter Sloterdijk, 1947-) の三部作『球体 (Sphären)』(1998年～2004年) が念頭に置かれている。原著で3冊合わせて2500ページに及ぶこの大作は、英語やスペイン語ではすでにその翻訳が完結しており、フランス語訳も第2巻まで刊行されている。英訳の標題は、当然 Spheres である。

かつて、『シニカル理性批判』(1983年、日本語、拙訳、1997年、ミネルヴァ書房) で衝撃のデビューを果たしたこともあって、ドイツでもスローターダイクというと、やはりこちらの本を連想する人が多い。30年ばかり前になるが、私は、『シニカル理性批判』に続いて彼が発表した小説『魔の木』(1986年、日本語訳、1988年、岩波書店) を、原著の刊行後、間もなく、妻との共訳で日本語に訳したことがある。スローターダイクは、当時、ドイツ以外ではそれほど知名度は高くなく、スローターダイクの単行本の翻訳はこれが世界で初めてでなかったかと思う。『シニカル理性批判』は原文でおおよそ950ページの厚さで、その翻訳はさすがに時間がかかり、原著の刊行から14年後に日本語訳の出版に辿り着いた時にはすでに英語訳が出ていた。ただ、それでも、当時は、スローターダイクの翻訳は世界全体を見渡してもさほど多くなかった。スローターダイクは、その後も、ごく短いものまで含めるとほぼ毎年のように著作を刊行し続け、その中に時に大作、超



\* Tamaki TAKADA

1954年1月生  
京都大学 大学院博士後期課程 文学研究科 哲学専攻 学修 (1981年)  
現在、大阪大学 言語文化研究科 言語社会専攻 ドイツ語教室 教授  
文学修士 哲学・ドイツ現代思想  
TEL : 072-730-5361  
FAX : 072-730-5361  
E-mail : takada@lang.osaka-u.ac.jp

大作の類いがいくつか出現する。文章が凝っていて複雑な上に、理論的な記述の中に、その時々の世界の話題に対する風刺や皮肉を織り込むので、面白い半面、読むのにひどく骨が折れる。私も、大学での業務や、別の翻訳出版に絡む仕事で忙しくなり、『球体』が刊行され始めたころから、彼の新刊書が出て目を通すことがままならなくなった。比較的、短い講演や著作のいくつかが仲正昌樹氏によって、かなり初期のニーチェ論が別の人たちのグループによって翻訳刊行されているが、『球体』はもとより、それ以後の長大な著作群は日本ではほとんど紹介されていない。ところが気がつくと、海外ではこの十年ばかりのあいだにスローターダイクはすっかりスターダムにのし上がり、今では主要な著作についてほぼすべて英語訳が刊行されている。相当、長いものでも、原著の刊行からそれほど時間を措かずに英訳が出る。スペイン語、フランス語への翻訳も多い。京都大学で、2年前まで美学の講座を担当していた吉岡洋氏の話では、彼のところに来る留学生たちの多くがスローターダイクをよく読んでおり、特に建築に関心のある留学生たちは、『球体』の議論に通じているという。吉岡氏自身、若いころ、スローターダイクの論文をひとつ訳したことがあるのだが、自分たちがあまり関わることができないうちに、日本はスローターダイクの受容に関して後進国になってしまった。

スローターダイクは、長く国立カールスルーエ造形大学の学長を務めていたが、2014年に67歳で学長としては定年退職した。昨年7月には70歳となって教授としても定年を迎え、それを記念する、「いまだ輝かぬ曙光」と題するシンポジウムが同大学で開催されている。しかし、昨年にも『神の後で』と題する論集、一昨年にはやはり論集『二十世紀に何が起こったか』、さらに『魔の木』以来、久々の小説『シェリング・プロジェクト』を刊行するなど、執筆意欲に衰えを見せない。とはいえ、膨大な著作群の中でも、その生涯の代表作となるのは、最終的にはやはり『球体』だろう。

この「球体」、「スフェアズ」ということで、スローターダイクがどういった事態を指しているかと言えば、ヒトはそもそもかつて剥き出しの自然の中にあつた状態から、自らのまわりに固有の空間、一種の島のような場を創り出すことによって人間となっ

た。人類史とは、ヒトがこの人工空間を構成しその中で人間となる過程である、と考えられている。これに関連して、スローターダイクは、「人間創造 (Anthropopoiese)」といった言い方をするが、これは人為的な空間を人間が作ったという意味で「人工・人造」を意味すると同時に、その空間がそもそも人間という一種独特の存在を創造した、という意味にも解される。人為的な空間を自らのまわりに構築することで、周りから隔絶したこの空間の中で、人間に固有の経験の形態が生成するという。自分のまわりに一種の温室のような空間を造ることで、自分たちにとって過ごしやすい人工的な環境を生み出し、この中で様々な技術を介して現代人へと変化してきた。その意味で、人間とは、そもそも技術的な存在なのである。『球体』三部作は、「球体」をモチーフとした壮大な人類史の叙述であると言える。それぞれ「泡袋 (Blasen)」、「地球儀 (Globen)」、「泡だち (Schäume)」と題された各巻 (英訳では、それぞれ、Bubbles, Globes, Foams) の中で、人間が自分を包む巨大な袋状の泡としての球体の中にいる状態から、やがて、歴史の中で自らを地球上に住む存在として見出し、地理上の発見を通じて世界を資本の内部空間へと変容させ、さらに無数の泡の集合としての近代都市を形成してゆく過程が描かれる。最初の「泡袋」は、子宮の中に胎児が浮かぶ状態から、人間が球状の巨大な宇宙の中で自分の定位置を見出していた状態を指し、人類史の起源から、西洋では古代、中世までを包摂する時代が念頭に置かれている。一方、「地球儀」と訳した Globen だが、これは、言葉としては、ラテン語で、ギリシャ語の「球体」「スパイラ」に相当する Globus をドイツ語として用いた場合の複数形である。具体的には、スローターダイクはそこで地球儀と、球体としての地球を念頭に置いている。人間は、自分たちを包み込む球体としての宇宙の中で安住していた状態から、自分たちが拠って立つ大地それ自体を球体として発見し、やがてその征服に乗り出してゆくことになる。現存するドイツ最古の地球儀が製造されたのは、コロンブスによるアメリカ大陸発見と同じ1492年だという。われわれを包み込んでいた球体は、中世から近世に転換する時代に、各種の地球儀の制作を手掛かりに、われわれによって見据えられ対象化される球体へと変容していくのである。

第三巻の「泡だち」であるが、ここで論じられているのは、おおむね19世紀以後の時代である。ここに及んで球体は、各個人や共同体が外に対してある種の被膜を作り、空気を含め、他の個人と共同体に対して自らを隔離しようとする動きを指すことになる。近代は、あたかも自然環境の外気をそのまま内に取りこんだかに見える、完結した空間を創り出そうとする。開放的と映りながら、その実、この空間はまた外部や他者を排除する場でもある。ヨーロッパ各国が、植民地支配の象徴として競ってそれぞれの首都に建設した植物園、とりわけその温室。19世紀半ばのロンドン、ハイドパークに出現した「水晶宮」、ベンヤミンを魅了し続けた世紀末パリのパサージュ、現代において世界各地に次々と建設される巨大なショッピングモール……。ガラスと鉄材の使用が可能としたそれらの空間は、外部の自然を内部に取り込む親和的な融通無碍の空間を演出しながら、その実、また排除と搾取の場所でもある。他者として征服し排除した外の世界が内部で疑似的に複製される。現代世界は、こういった外部と内部の融合と排除を巧妙に組み合わせた空間が無数の泡つぶとなって連なる世界としてイメージされている。「テンセグリティー」と称して大きなスパンを持つドーム状の建てものを各地に試みたバックミンスター＝フラワーの実験的な建築が何度か言及される。また、この第3巻の表紙には、グリムショウらによってイギリスのコーンウォールに建設された「エデン・プロジェクト」の写真が用いられている。丘陵地帯に広がる半球形のドームが連なる「エデン・プロジェ

クト」は、半球の形状がなだらかで、繋がり方も不揃いであるなど、アマゾン社の「スフェアズ」とはだいぶ異なるが、それでも全体としてはずいぶんよく似ている。

今回、アマゾン社の新社屋をデザインしたデイル・アルバーダ (Dale Alberda) が、その構想に当たって、スローターダイクの球体論の議論を強く意識したかどうかは分からない。この建築に言及するいくつかのウェブサイトを見たが、直接の連関を説くものは見当たらない。しかし複数の球体を連ねたこの建築が、「Spheres」と命名されているとき、スローターダイクの『球体』が念頭に置かれなかったとは考えにくい。ドームの中に、多くの植樹が行なわれているというのも、ありふれた趣向と言えはそれまでだが、この種の建築が実は植民地支配の富と権力を象徴する、ヨーロッパ列強の王都を飾る植物園の温室として出現したとするスローターダイクの指摘と符合する。無数の「球体」の連なりとしての人工の空間、「泡だち」としての世界、そこにスローターダイクが共感を覚えるのか、それともむしろひとつの脅威を感じているのか、例によって韜晦的な彼の記述は一義的な解釈を許さない。現代世界の空間経験を集約すると考えられている、こういった透明のドームをあえて本社の社屋として建設し、それを「スフェアズ」と命名したアマゾン社は、そこに何を託し、また何を暗示しようとしているのか。「球体」をめぐるスローターダイクの語りが二義的なだけに、気になるところである。

